

---

---

## 「新キニク派の美学」とは誰の如何なる美学か

——P.スローターダイクと C.シュリンゲンジーフとの対話を手掛りに

岡林 洋 (同志社大学)

---

---

上記発表題目に掲げるのは、現代ドイツの社会哲学の第一人者であるペーター・スローターダイク (Peter Sloterdijk) (1947~) の著作 “Philosophische Temperamente Von Platon bis Foucault” (2009) の文末に登場するものだが、具体的に誰の美学 (の傾向) を指し示すものかについて究明する手掛かりは今のところ全くない。発表者は、そのことをこの哲学者が著作を執筆した際 (フーコーおよび現代哲学の諸潮流を論述した文脈において) 突然飛び出したこの不思議な美学名に現代社会にとってアクチュアルな美学のイメージを持った。本発表ではこれを一人の演劇家が残した業績と、そしてスローターダイク自身の『シニカル理性批判』(1983 年) 以降の哲学的文脈とによって合成された美学として取り扱うことにする。哲学者自身がこの美学名を誰の美学を念頭に著作中に掲げたのかを探すことは、次第に発表者の関心からは外れて行くことになったのである。

一人の演劇家とは、現代ドイツでその死後にとみにその名が知られるようになった、また芸術的業績に対する学問的研究が欧米で盛んになっているクリストフ・シュリンゲンジーフ (Christoph Schlingensiefel, 1960~2010) のことである。日本では、2000 年にウィーンで彼が行った《Ausländer Raus》(原題の意味は直訳すれば《外国人よ、出て行け》になるが、このスローガンを掲げてオーストリー総選挙で第一党となり内閣を組閣した FPÖ の危険性を世に問うことに彼の意図があったと解釈することが適切であろう) の政治演劇的アクションが映像で紹介された程度である。一方、ドイツを中心に欧州では彼の業績は、政治演劇の文脈でプレヒト、現代アートおよびアクションのそれではボイスを継承するものであることが先行研究において明らかにされており、また 19 世紀の R.ワーグナーの総合芸術とは全く次元を異にするものの、やはりここにも現代の総合芸術の試みが読み取られると指摘されている。このドイツを中心とする、ポスト・プレヒト、ポスト・ボイスの文脈からの研究が尽きることのない現状に比して、日本の現状ははるかに見劣りする。

但し今回の発表では、これらの先行研究のあとを追うつもりは全くない。スローターダイクとシュリンゲンジーフが既に挙げた 2000 年の《ウィーン・コンテナ・ショウ》(《外国人よ、出て行け》の別名) の結果を巡って行った対談でのやり取りの分析とその評価が、本発表のメインピックとなる。そこでは特に哲学者の独特の社会哲学思想が、若きアーティストのアクションに対する美学的解釈の補助手段として用いられていることが読み取られる。この対談の中で哲学者はこの政治演劇家のアクションを言い表す際、しばしば「キニク派」という言葉を用いている。それに対する異論、反論がシュリンゲンジーフから出された形跡はない。この対談のあと、二人はドイツにおいて 9・11 以後の芸術とテロリズムを巡る研究組織 (Atticismus-Seminar) の中心メンバーとして密接な関係を築いて行くことにもなる。スローターダイクの場合、美学に特化された著作もあることはあるが、発表者はこの二人の対談の方が数段、現代社会に対するアクチュアリティを持っていると考えており、またそれとは逆に、バーチャルな次元であるとしても、古代ギリシャのキニク学派のディオゲネスの評価からはじまる哲学思想を芸術と美学の領域に持ち込む可能性をそれは我々に開示していると考えている。